

## 【第1部 講演2】

## 現代日本社会と少年非行対策

矢 島 正 見

中央大学文学部 教授

## 1. 犯罪、少年非行情勢概況

## 1-1 犯罪

2002年、一般刑法犯（危険運転致死傷、業務上（重）過失致死傷及び自動車運転過失致死傷を除いたもの）認知件数285万件、犯罪率（人口10万人当たりの認知件数）2,239をピークに、2003年から急激に減少し、2013年では刑法犯認知件数132万件、犯罪率1,037となっています。過去11年間で件数でも率でも半減しているわけです。

2004年から2013年の包括財種別認知件数では、凶悪犯は13,064件から6,766件へ、粗暴犯は76,616件から6,661件へ、窃盗犯は198,574件から98,272件へ、知能犯は99,258件から3,089件へとなっていて、いずれも著しい減少を示しています。

## 1-2 少年非行

刑法犯少年の検挙人員は、2003年の14万4千人をピークに2013年では5万6千人と急激な減少を示しています。人口比（当該年齢千人当たりの比率）で見ても、17.5から7.8へと著しく減少しています。

## 1-3 犯罪被害

2013年の20歳未満の者が被害者となった刑法犯の認知件数は20万件でした。2002年には40万件を超えており、11年間でほぼ半減したことになります。

## 1-4 全体的な動向

ここから、ごく単純な全体的動向を考察するならば、犯罪も少年非行もともに、また加害も被害もともに、現時点ではまれにみる平和な時代に至っている、と言えることです。

戦後の少年非行は、量的には4つの波があり、今はその4つ目の下りにあります。また、質的には、硬派の非行の時代（粗暴性が高く、傷害や性犯罪では強姦が高い時代であり、流行的非行・問題行動としては愚連隊、地域粗暴集団、カミナリ族・暴走族、番長、校内暴力。）と軟派の非行の時代（退行性が高く、薬物や性犯罪では売春や性的交遊が高い時代であり、流行的非行・問題行動としては、睡眠薬遊び、シンナー乱用、フーテン、家出、援助交際、覚せい剤乱用。）とがほぼ交互に出現しているのですが、今はそのどちらでもありません。実に不気味なほどに静かな状況にあります。

ただし、問題がなくなった、ということではありません。以下、主だった問題事象について、概略的に述べていきます。

## 2. 主な青少年問題

### 2-1 不登校

日本が抱えている具体的な青少年問題は実に多様です。教育問題としては、未だに「不登校」と「いじめ」の問題が続いています。

「不登校」は1970年代後半から社会問題化した現象であり、80年代になると急激に増加し、不登校の定義も1991年以降「年間欠席50日以上」から「年間欠席30日以上」と変更されています。

政府のカテゴリーも長期欠席理由の「その他」から「学校嫌い」となり、さらに「登校拒否」となり、「不登校」になる、という変遷が見られ、初期では、原因は「本人の問題」「家庭の問題」とされていたのですが、1990年代に至って、「教育の問題」「学校の問題」となり、「学校に行かないで生きる」という方向性が顕著化してきました。こうした言説の逆転は、当事者（特に親）の社会活動（異議申し立て活動 claim-making activity）によるもので、ここからも日本の当事者主義は発展していきます。

### 2-2 いじめ

日本で「いじめ」が注目されたのは1980年代の中頃からです。当初は、いじめる側といじめられる側という二項対立図式で問題の解決を模索していましたが、その後の研究により、クラス全体の人間関係因子が問題とされ、またいじめられる側に立っての対策がとられるようになりました。

この政策視点は少年非行を語るときにもきわめて重要になります。と申しますのも、「全面的に被害者側に立つ」という政策方針だったからであり、犯罪においての被害者側の視点の原点のひとつと考えられるからです。

### 2-3 ひきこもり

「ひきこもり」は、「不登校」の社会人版と言えましょう。「無気力な青少年」、「ふれ合い恐怖の青少年」、「職場恐怖症」「カプセル型若者」「非社会的青少年」等という言葉は、既に40年前から指摘されていたのですが、2000年前後から、大きな社会問題として登場してきました。また、その軽度な状態では「ニート」とつながっていて、青少年の教育問題・福祉問題・労働問題という総合型問題として、多様な政策が試みられています。

具体的な対策としては、ひきこもり青年とその親への心理カウンセリングであり、ニートや若年ホームレス（ネットカフェ難民）の就労支援であります。つまり、「立ち直り支援」であり、「若者の自立支援」ということになります。

### 2-4 児童虐待

家庭で起こっている大きな社会問題は「児童虐待」です。児童相談所への児童虐待の相談件数は、ここ20年間（1990年～2013年）で60倍となっています。児童相談所は、この児童虐待への取り組みで精一杯の仕事状況に追い込まれているのが現状です。

虐待する親は低階層・低学歴に多く、また、両親や親類縁者とのつながりがなく、地域では孤立し、援助も相談もできない状況にいる親が多いのです。また、非行少年のなかには被虐待経験の少年の比率が高く、大きな非行リスクファクターとなっています。

### 2-5 ドメスティック・バイオレンス（DV）とストーカー

DVの大半は夫から妻への暴力です（ただし、妻から夫への暴力もあります）。しかも、時として子どもへの暴力も伴

います。母子同時の暴力すらあります。たとえ子への暴力がなくとも、父親から母親への暴力を見て育った子どもに与える精神的負担は大きなものです。そして、たとえ暴力の父から逃れて母子生活に移行したとしても、その心の傷は残ることになります。

ストーカーの大半は男から女に対してのものです。主に10代から30代への若い女性への執拗なつきまといは、男の精神的異常性を示していますが、そうした男の異常性を生み出した社会・時代を考える必要があります。

## 2.6 特異な犯罪

神戸連続児童殺傷事件（いわゆる「酒鬼薔薇聖斗」事件）、大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件、秋葉原通り魔事件、等々。これらのいわゆる「特異な犯罪」は、いつの時代にもあったものの、近年の犯罪のひとつの特徴を表しています。そして、これらの事件では、犯人の精神的な問題を提起したと同時に、こうした事件を生み出した社会・時代の問題をも提起しております。

## 3. 青少年を取り囲む社会・時代状況

上記の青少年問題、犯罪・非行に対して、青少年の心の問題ということだけでなく、社会・時代からどのように考察し得るのか、そして、こうした社会・時代は、一見何の関連性もないと思われる犯罪・少年非行の増加・減少化と、どのようなつながりがあるのか。次に、こうしたことを考えていきたいと思います。

### 3-1 格差社会と若者の社会的排除

まず第一に、「格差社会」と「若者の社会的排除（social exclusion）」の問題とその政策です。

この問題は日本における戦後最大の危機である1991年のバブル崩壊から始まります。このバブル崩壊は日本経済をどん底に落とし込め、豊かさ・便利さ・快適さ・面白さを満喫していた人々の意識を、「軽薄短小」と呼ばれていた文化を、さらに若者の青春謳歌をたちどころに吹き飛ばしました。一時期立ち直りを見せたものの、いわゆる「リーマンショック」（サブプライムローンの焦げ付きによるリーマン・ブラザーズの破綻）により再度日本経済は悪化し、今現在、回復の兆しは見えて来たものの、二十数年間の停滞状況（いわゆる「失われた20年間」）を脱し切れてはいないという状態です。

こうした経済状況を背景として、青年・壮年（18・9歳から30歳代）の就労が量的にも質的にも大変化を起こしました。正規雇用の減少・非正規雇用（派遣、臨時、パート、等）の増加であり、低賃金の非キャリア雇用形態です。

こうして青年・壮年の二極分化が出現します。経済資本・文化資本・社会関係資本の乏しい家庭で生まれた子どもたちは、学歴が低く、学業成績が悪く、そのために正規就労もままならず、親同様に経済資本・文化資本・社会関係資本の乏しい生活を送ることになります。しかも、今では結婚すらできない若者が男女ともに増加しています。結婚できるのは中産階層以上を確保している層に偏ってきているからです。

ここから「ニート」「ひきこもり」「若年ホームレス」の出現という状況や「パラサイトシングル」の変容が発生します。親と同居して、稼いだ金をすべて小遣いとして使えるというリッチなパラサイトシングルから、親と同居生活していかなくては生活できないというパラサイトシングルへの変容。家に閉じこもり社会関係と断絶する「ひきこもり」。将来の展望もなくぶらぶらしていられた時代が終わったにもかかわらず、いつまでもたっても働かない青年・壮年の問題化（「ニート」）。パラサイト・シングルでいることも、ニートでいることもできず、家を離れ、簡易宿泊所にもカプセルホテルにも泊まることのできないホームレス。こうした青年・壮年を出現させています。

パラサイトシングル、ひきこもり、ニート、ホームレスは氷山の一角です。経済資本・文化資本・社会関係資本の二極

分化がもたらす人びとの勝者と敗者の二極分化。こうした状況からの挫折と怨念は、底辺の青年・壮年に鬱積していると考えてよいでしょう。そして、ごく一部の青年・壮年は、大阪教育大学付属池田小学校児童殺傷事件や秋葉原通り魔事件を典型とする自己破滅型の特異な犯罪を引き起こすのです。

したがって、このタイプの犯罪は、少年犯罪ではなく、20歳代・30歳代の青年・壮年層に多く出現する犯罪と言えます。ですから、今、少年非行がまれにみる低率といえども、その少年たちの10年後・20年後は、どのようになるか、予測がつきにくいのです。非行少年も成人になればまともになると言われていますが、逆に、まともな少年も成人になるとおかしくなる、と今後は言えるのかもしれませんが、自己破滅型の犯罪が特異ではなく、ごくありふれた犯罪になるとき、欧米同様に、日本の治安は最大の危機に見舞われることでしょう。

### 3-2 日本の親子関係の限界

こうしたバブル崩壊以降の格差社会を、かろうじて支え続けているのが中高年層の人たちです。つまり青年・壮年層の親たちです。しかし、こうした親世代も高齢化してきています。いつまでも、子どものニート、ひきこもり、パラサイトシングルを支え続けていることはできません。今では、親の年金で親子が生活しているといった状況すら、当たり前のことになってきています。

親の子に対する想いは強く（孫に対しての想いも強いですが）、こうした善の心を踏みにじる犯罪が振り込め詐欺なのですが、あと10年ほどで、おそらく老親は子どもの生活を支えきれなくなると思います。そうしたときは、ニート・ひきこもり・パラサイトシングルでいられなくなった壮年・中年層の大量出現に見舞われる危険性大です。そして、その中の何人かはホームレスとなり、何人かは自殺という行為に走り、また何人かは無銭飲食・万引きといった軽い犯罪から強盗・殺人といった凶悪犯罪に至るまで、犯罪に手を染めることになるでしょう。

既に、この日本の親子関係から排除された青年・壮年はホームレスとなっていますし、児童虐待も、虐待する親は地域との関係が断絶しているだけでなく、大半は老親とも断絶している状況にあります。子と断絶した老親を問題視して「無縁社会」という流行語がつくられましたが、児童虐待の親もまた無縁社会の中で生きているのです。そして近いうちに、多数の壮年・中年もまた無縁社会の中で生きて行かざるを得ないのです。

### 3-3 ネット社会

バブル崩壊後の日本社会は、また「ネット社会」でもあります。このネットに関してはさまざまな問題が提示されています。ネット売春、ネット自殺、ネット犯罪、ネットいじめ、さらにネット依存、等です。

ネットはバーチャルの世界として、現実の世界とよく対比されています。しかし、バーチャルの世界と現実の世界が明確に峻別できていたのはテレビの時代です。ネット時代では、円やドルの売り買いや株の売り買いもネットであり、まさに現実の経済がネット上で展開されているわけです。したがって、ネットは現実の一部と考えていく必要があります。しかも、今現在の現実だけでなく、未来にも継続される現実です。

少女の遊び半分のヌード画像掲載は、現実そのものであり、少女の将来の人生行路を規定するものです。また、誹謗中傷の書き込みが自殺や殺人を招いています。

ひきこもりがひきこもってられるひとつの要因はネットがあるからです。ひきこもることのできる空間と衣食のサービスを提供する人とネットがあれば、人は案外とひきこもることができるものです。秋葉原通り魔事件の犯人は、最後の対人関係のよりどころをネットに求め、そこでも無視されて犯行に及んでいます。ネットは孤立した人の最後の生活空間、ということもできるのです。

### 3.4 利と軽薄さと

戦前・戦中から戦後の貧しい時代、そして高度経済成長時代を経て豊かな社会までの、人びとそして青少年の価値意識の変遷は大きく次のように位置づけることができるでしょう。

戦前・戦中から戦後の貧しい時代、そして高度経済成長時代への移行では「善から利」への価値意識の変遷が、高度経済成長時代を経て豊かな社会までの移行では「利から快」への価値意識の変遷が認められます。

1970年代頃から1980年代にかけては、豊かさ・便利さ・快適さ・面白さを求める、いわゆる「軽薄短小」文化がマスメディアの普及拡大とともに浸透した時代でした（面白くなければテレビではない、というキャッチコピーすら出現）。

「物の豊かさよりも心の豊かさ」などというキャッチコピーが現れたのですが、結局は、物欲だけに飽き足らぬ、グルメ志向、健康志向、自然志向、そして親密関係志向というより多くの快楽を望んだに過ぎません。

当時、学校では「真面目」や「真面目な生徒」は軽蔑の対象であり、少々逸脱した「面白悪ガキ」のほうが人気がありました。生徒文化そのものに逸脱性が見いだされていたのです。

こうした意識が変わり出したのがバブル崩壊後であります。豊かな時代からバブル崩壊時代に至る移行では「快から利」という価値意識の変遷が認められます。大人だけでなく、後半（2000年代以降）は、青少年にもそうした意識が浸透していきました。

バブル崩壊後、大学は最終学府ではなくなり、就職のための途中駅と化し、大学歴・学校歴がのちの人生行路の制度的手段と化し、高度経済成長期の出世主義が再台頭しました。現在20歳代の青年は、子どもの頃から、こうした価値意識を持って育てられています。

したがって、真面目で、慎重であり、計画性があるという面を持っていると同時に、軽薄さを嫌悪し、規範にうるさく、許容性が狭い、という傾向を示しています。非行が減少するのも当然です。また、軽薄な生徒文化の下火や子どもの公衆でのマナーの回復（ひところは、地べたすわりの少年や、公衆道徳欠如の子どもの叱らない親、叱れない大人が話題となりました）が見られるのも当然のことです。

ただし、いつまでも大人になれない大人も存在します。結婚できない大人、親から自立できない大人、いつまでたっても芸能関係に熱中するという大人だけでなく、未だに軽薄さが残存し、悪ふざけが許されると思っている大人です。ネットに自己の馬鹿さ加減をさらけ出している青少年はこの類です。「悪意」ではなく「軽薄さ」が問題だけの青少年です。

こうした軽薄さに対して、情け容赦なくネットでたたき正義の青年・壮年こそ、慎重であり、軽薄さを嫌悪し、規範にうるさい青年・壮年です。そしてこうした青年・壮年こそが今の主流派となっています。しかし、この青年・壮年も大きな問題を持っています。

このことに関しては、再度取り上げます。

## 4. 政策の基本的方向性

### 4.1 現在の基本政策

政策面では、相変わらず理念とイデオロギーに基づいた（ideology-based）政策提言がなされています。また、マスメディアで騒がれたことに対して、今の政治家は過剰なほど敏感ですので、メディアに影響された政策提言が台頭してきています。ネット社会では、この傾向はさらに強くなっていくのではないかと危惧せざるを得ません。

こうした状況に対して、対抗できるのが科学的根拠（evidence-based）に基づいた政策です。スケールの大きな政策提言には不向きですが、きめ細やかな対策提言には有効と思います。

「公－私」という戦後の社会構造から「公－共－私」という社会構造創造をめざすという方向性は、実にすばらしいこ



とであり、継続していく必要があります。日本人はお上に弱いと言われていますが、弱いだけでなくお上に依存もしているのです。それは戦後、日本国民は共同体的性格を持っていた地域や同族の「共」の面を解体させていったからです。であるからこそ、再創造が必要なのです。警察と地方自治体と学校と地域活動諸団体と地域住民との地域連携は、まさにこの「共」の実践です。始まったばかり（と言っても、もう10年ほどになるでしょうか）ですので、試行錯誤しながら、地域に根を広げていきたいものです。

多機関連携（警察という機関からみれば他機関連携）も始まったばかりです。まだまだ発展させる必要がありますし、その余地もあります。これはかなり法律・政治次元ですので、法務省・文部科学省・厚生労働省・警察庁・等と法律の専門家にお任せします。しかし、「地域（community）」次元では社会学の登場です。

再非行率の上昇は、非行が減少した結果現れた現象と推測し得ます。したがって、わたしはさほど問題視していませんが、犯罪・非行が減少した今、対策を構築しておくことは大切なことです。

しかし、こうした現状の対策と同時に、今後出現してもおかしくない、今まで私が述べてきた時代状況を想定しての、対策を考えておく必要もあると思えます。実際に起ってから「想定外」と、あわてたのでは、遅すぎということです。（「既に、2014年の京都産業大学でのシンポジウムで矢島が指摘していたことである」なんてマスコミに取り上げられないようにしていただきたいものです。）

#### 4.2 子どもと大人

さて、大人と子どもの領域があいまいになっているのが現在です。近代社会は「子ども」を誕生させました。「学校」という制度が、子どもと大人の峻別の確立に役立ったと言えると思いますが、「一人前」という基準のあいまいさは、以前から存在していました。

ところが、ネット社会は、この不完全な「一人前」という基準すら消失させてしまいました。ネット社会では、大人も子どもも平等です。それは言い換えれば、子どもも大人と同じに扱われる、ということです。

ネット社会のみならず、さらに結婚しない大人、子育てしない大人、自立しない大人、生産活動に係わらない大人、社会関係に参加しない大量の大人の出現は、「大人」という概念すら変容させつつあります。ただ、歳とっているだけのこと、となります。「大人役割」というものが存在しなくなります。

「大人が変われば子どもも変わる」と言われていましたが、これは〈大人は子どもに影響を与えている〉という前提のことです。親でもない、教師でもない、親類縁者でもない（実態として）、地域住民でもない（実態として）という年取った人（20代・30代・40代）を「大人」と呼ぶことに躊躇せざるを得ない実情です。

今、大人も無縁社会の中にいます。自立できないでいます。経済資本がないだけでなく、社会関係資本もありません。したがって、子どもの保護育成・被害防止のためには、そうした親たちや地域の大人たちも保護育成しなくてはならなくなってきました。子どもとともに大人も保護育成する必要があるという、実に面倒な時代になりつつあるのです。

ひきこもりの大人、パラサイトシングルの大人、ホームレスの大人、ストーカーの大人、児童虐待の大人、さらに人生に挫折し自暴自棄になりつつある大人、これらの大人に対して、〈子どもと共に大人を変えなければ〉というキャッチコピーが必要となる時代が待ち構えている、と危惧せざるを得ないのです。

#### 4.3 ネット大衆社会

〈ネット大衆社会〉は〈相互監視社会〉です。些細な出来事でも、全世界にさらけ出します。ネット大衆社会では〈一億層評論家〉となります。それだけでなく、〈一億総裁判官〉となります。評論内容自体はそれなりに的を得たことであっても、ネットで評論を展開するということだけで、些細な出来事も巨大化します。学校や警察や裁判所に任せておけばよ

いことでも、人びとは判決を下します。それ故に、ネット大衆社会は〈相互バッシング社会〉となります。

商品に欠陥があったと従業員を土下座させた女性の正義の画像投稿、それに対しての逆正義の批判。まさに一億層評論家・一億総裁判官、相互バッシング社会です。以下は、こうしたことに関して書き込んだ私のホームページです。

#### ●「まんだらけ」万引き犯顔写真公開 Yahoo 調査

偶然に、面白い数値を見た。例の万引き犯人顔写真公開問題だ。

「やりすぎだと思う」10229票（5.4%）、「妥当だと思う」173163票（91.6%）、「分からない／どちらとも言えない」5662票（3.0%）。男性79.0%、女性21.03%。（2014.08.14 15:00）

ランダムサンプリングではないだけでなく、かなりの偏りが想定されるが、それでも実に面白いデータである。「厳罰化」が、法律・制度・政策次元のことだけではなく、国民の意識そのものの次元でもあるということが、明確に出ている。

法学者は、20年前の法的正義が、今のネット大衆社会の中では批判・否定されているということを、認識せざるを得ないのではないだろうか。

#### ●一件落着

「まんだらけ」容疑者逮捕、これにて一件落着。

警察の非公開要請も、「まんだらけ」が取った対応も、正しかったわけ。さほど難しい犯罪事件ではなかったが、警察も早期解決を目指して、必死だったはず。

とにかく、現在は「民意」という正義の沸騰が高まっている時代であるということを、ひしひしと感じさせられた事件だった。

オルテガの大衆社会論が、今、装いも新たに〈ネット大衆社会論〉（ネット時代の大衆社会）として登場して来るか。

こうした時代では、警察も批判され、バッシングを受けます。もちろん、正すところは当然正す必要はありますが、しかし、警察は、毅然と、そして肅々と対応していただきたいと思います。また、犯罪・非行対策は、ネット大衆に決して迎合せず、法治国家・民主主義国家の警察として、政策・対策・現場実践を行っていただきたいと思います。

## 5. まとめ

以上ですが、最後に要望としてのまとめを提示させていただきます。

第一に、当然のことですが、今現在行われている犯罪・非行対策を継続して実行していただきたい。

第二に、時代状況を鑑みて、10年後・20年後の日本社会を想定し、想定外の犯罪・非行状況が出現しないように、早期警戒・早期対策を心がけていただきたい。

その際、少年だけを見ての対策ではなく、青年・壮年層の置かれている・置かれ始めている社会的実状を想定し、体系的な対策を配慮していただきたい。特に、問題を抱えた少年の問題を抱えた親や問題のある親とその子どもに対しては。

第三に、マスコミの評論に迎合することに警戒するだけでなく（私の見解では、いわゆる有識者や政治家の一部は多分に迎合している）、ネット大衆社会の感情的情緒的見解に対しても、冷静に対処していただきたい。

